

「移民予備軍」の若者たち 後期モダニティにおける日本人青年の「自己」と世界観

加 藤 恵津子

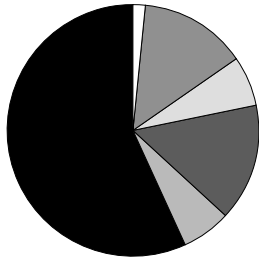
はじめに

移民——ある国の国民が他国へ、国籍と定住を求めて移動すること、またはそうする人¹⁾——の背景には、通常、母国に差別・貧困といった「プッシュ要因」が、または/そして移住先に「より良い」住環境といった「プル要因」がある。典型的な移民のイメージを担う20世紀半ばまでの移民たち、すなわち「旧大陸」ヨーロッパや、日本・中国などのアジアからアメリカ合衆国・カナダ・ブラジルなどの「新大陸」へ渡った、飢饉にあえぐ農民、人種差別から逃れようとするマイノリティなどにおいては「プッシュ要因」、すなわち「母国では生活していけない」切羽詰った状況が、「プル要因」に先立って存在していたと考えられる。そして今日でも、そのような人々は移民のうち大きな割合を占めているだろう。

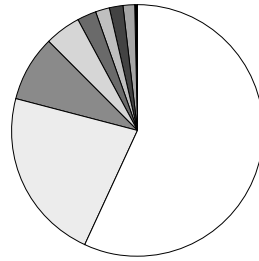
現在の日本も、在日コリアンなど一部在住者に対し決定的に不利な社会であり、彼/女らを移民としてプッシュ・アウトする素地は充分にある。これは非常に重要な問題であり、綿密な調査を必要とする²⁾。だが本稿ではまず、生まれながらに日本国籍を持ち、民族的にも「日本人」を自称する、いわゆる「何不自由ない」はずのマジョリティでありながら、日本以外の国へ移民することを望む若者たちに着目する。彼/女らはなぜそれを望むのか。そして彼/女らを従来の移民とは異質化する、日本と世界を取り巻く今日的な事象とはどのようなものなのかを考察したい。方法論としては、カナダ・バンクーバー市で日本人青年一時滞在者にインタビューして得たデータを、「後期モダニティ」ないし「ポスト工業化社会」における「自己」や「若者」について論じた社会学の知見に基づき分析する。

研究の背景

まず、なぜ本研究の対象が「バンクーバー」の「青年」「一時滞在者」なのかについて簡単に述べ、次にインタビュー全体の詳しい状況や特徴を述べたい。筆者は2001年から2002年にかけての1年間、カナダ西海岸のブリティッシュコロンビア州・バンクーバー市に、ブリティッシュコロンビア大学のポストドクトラル研究員として滞在し、「日本人青年一時滞在者のメンタルヘルスとサブカルチャー」について、インタビューを主とするフィールドワークを行った。きっかけはバンクーバーの日系人コミュニティが、母語（日本語）による「心のケア」の必要性を語り合うシンポジウムを開いたと、新聞で読んだことだった³⁾。この時、ケアを受けるべき「日本語話者」として、移民（カナダ国籍や永住権の保持



□ 小学校	1.6%
■ 中・高校	13.9%
□ 大学（学位）	6.5%
■ 大学（語学）	15.2%
■ 専門学校/英語学校	6.4%
■ その他/英語学校	57.4%



□ ブリティッシュコロンビア	56.89%
□ オンタリオ	22.19%
■ アルバータ	8.45%
■ ケベック	4.63%
■ マニトバ	2.45%
■ ノバスコシア	1.8%
■ ニューブランウィック	1.75%
■ サスカチュワン	1.5%
■ その他	0.35%

（カナダ大使館による統計データをもとに筆者が作成）

グラフ 1 2001 年 学校レベル別 学生ビザ発給数（総数=6,615）

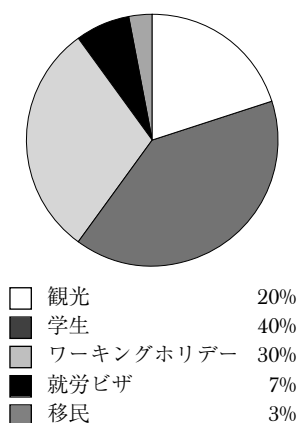
グラフ 2 2001年 州別 日本人留学生数（総数=6,615）

者）だけでなく一時滞在者も話題に上っていた。

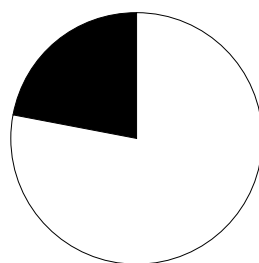
バンクーバーは、日本にもっとも近いカナダの都市の一つとして、1900 年前後より多くの日本人移民を惹きつけており、現在、カナダで最も大きい日系人コミュニティ（2 万人強）を抱える。ここで日系人と呼ばれる者は、大きく二つのグループに分かれる。すなわち第二次大戦前の移住者とその子孫、および、特に 1970 年代にピークを迎えた戦後の移民である。後者は「（戦後）移住者」と呼ばれ、前者と区別されることがある。一方でバンクーバーは、「一時滞在者」、つまり観光ビザ、学生ビザ、ワーキングホリデー・ビザを持つ者をも多く惹きつけている⁴⁾。ワーキングホリデー・ビザを携えてカナダを訪れる日本人青年のうち半数以上が、カナダの諸都市の中でもバンクーバーにもっとも長く滞在すると考えられている。この他に、バンクーバーでは数千人の日本人学生が、英語学校、高校、カレッジ、大学などに通っている。これらの状況を考えると、バンクーバーの日本人一時滞在者は、一般的に「若者」とであると言える（グラフ 1, 2 参照）。

この「一時滞在者」の数を把握するのは、しかし非常に困難である。というのも彼/女らには地理的な移動が多く、滞在期間が様々であり、また必ずしも領事館に在留届を提出しないからである。しかし彼/女らは滞在を延長し、数年に渡ってカナダに住むこともしばしばである。さらに、日本とカナダの間を（その度に違うビザを携えて）何度も往復することも珍しくないため、彼/女らの滞在期間は「通算で」数年単位になることも多い。また、観光ビザを持つ者も必ずしも「短期滞在者」ではない。というのも滞在延長の手段として、学生ビザなど他の種類のビザが切れる際に観光ビザに切り替えることもあるからである。

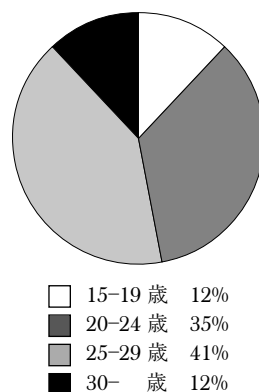
この、時には数年間単位でバンクーバーに滞在する数千人単位の若者たちは、日系人コミ



グラフ 3
2001-2002 年 インタビュ
イーのビザ種類 (総数=55)



グラフ 4
2001-2002年 インタビュ
イーの性別 (総数=55)



グラフ 5
2001-2002年 インタビュ
イーの年齢層 (総数=55)

ユニティからいわば遊離した形で生活している。たとえば住空間的には、車を持たない彼/女らは中心街（ダウントウン）周辺か公共交通機関の路線上に、車を持つ日系人は郊外の住宅街に住む傾向にある。二者が出会うとしても、一時滞在の若者は、日系人が経営する事業（レストランなど）の客か一時労働者になるくらいである。だがこれら一時滞在者は、後述するように「移民予備軍」、すなわち日系コミュニティのメンバー候補者であり、その存在は日系コミュニティにとって無視できないはずである。上述のシンポジウムでは、日系人医師と領事館職員が、そのような「一時滞在者」の中に精神の不調をきたす者が散見されることと、その保護や本国送還にまつわる困難を報告している。

筆者はこのシンポジウムの記事から、まず彼/女らのメンタルヘルスに関心を持ったが、それに関連して彼/女らの移民観・世界観にも関心を広げている。2001 年から 1 年間のインタビューイーの募集は、バンクーバーで発行されている日本語新聞や若者向けのフリーの情報誌、街中のコンビニエンスストアや留学情報センターの掲示板を使って行った。募集は二段階に分けて行い、まず 4 月に「一時滞在のビザを持ち、アメリカも含む北米に 1 年以上滞在している、またはそれを予定している若者」を募った（この時、大学や大学院の学位プログラムに所属する人は、（特権的）マイノリティにあたるので除外した）。この広告に対し 80 人から 100 人が応答したが、時間と予算の都合上そのうち 41 人を選び、1 人につき 1 時間半から 3 時間の詳細なインタビューを行った。次に 9 月に、「北米に来てからマリファナ・ドラッグ・アルコール依存、望んだのと違う異性関係、学校や仕事に行きたくない、のどれかを経験した人」という、より特殊な条件を付け加えて募集したところ、14 人が応答し、この全員にインタビューした⁵⁾。

この年度にインタビューした計 55 人のビザ・性別・年齢層による内分けは、グラフの通りである（グラフ 3, 4, 5 参照）。これを見ると、20 代後半から 30 代（前半）が圧倒的多数

を占める、女性が圧倒的多数を占める、という二つの特徴が顕著である。広告に応募してくれた人々の中に、すでにこのような年齢比・性別比の傾向があり、それは同時に、バンクーバーのダウンタウンで見かける日本人の若者たちの傾向と大きく変わらない、というのが筆者の主張である。この傾向は、韓国から来る青年一時滞在者とコントラストをなす。筆者はこれまでに 21 人の韓国青年一時滞在者にもインタビューをしているが、応募者の男女比は半々である。また、年齢層は 10 代 2 人（兄妹）、20 代前半 6 人、20 代後半 10 人、30 代 3 人だが、「20 代後半」に入る男性の多くは兵役の義務を終えて復学した 25 歳から 26 歳の大学生であることを考えると、マジョリティは「(母国の) 大学生」であると言える。

筆者はまた、2002 年（日本に帰国）以降は、夏に 2-3 週間バンクーバーを訪れ、少しずつ質問項目を変えながら調査を続けている。例えば 2004 年には、上述の 1 回目の広告内容に加え、「移民することを考えている人」という条件をつけてインタビューを募集したが、あまりに多くの応答（ほとんどすべて女性から）があったため、以後「移民手続きをすでに始めている人」に限っている。結果、現時点で、40 代前半までを含む日本人 18 人へのインタビューデータが追加されている。本稿ではこの追加分も含む計 73 人の、バンクーバーの日本人青年一時滞在者のデータを中心に考察を進める。

若者たちの特徴

1. 「一時滞在」から「移民」が、本人たちの認識上、切れ目なく続いている。

1970 年代までの移民が「移民」としてカナダへ渡航したのとは異なり、上述の若者たちの当初のステイタスは「一時滞在者」である。中には当初から明確に移民することを目指している若者もいるが、本稿で注目したいのは、渡航時に「もしカナダが気に入ったら移民してもいい」といった緩やかな移民願望を持っていたり、カナダ滞在中に「もう少し長く住みたい」と考えるようになったりする人たちである（そしてこちらの方が、移民希望者のうち多数派であると見受ける）。彼/女らはビザの延長やビザ種類の変更をしながら滞在を延ばすか、または数ヶ月間日本に帰り、短期労働をして次の滞在用の資金を貯めたり（何人かの言葉を借りれば「出稼ぎ」）、新たなビザを取得したりした上で再(々)度カナダに渡航し、「通算で」2 年、3 年といった「中期滞在者」となっていく。そしてこの中に、労働ビザ、さらには永住権を取ろうとする者が散見されるのである（動機については次項を参照）⁹⁾。

たとえばある 30 歳の男性（ワーキングホリデー；過去に学生ビザと観光ビザで各 1 回、バンクーバーに滞在）は言う。「[今回の] 目的は仕事を見つけること。極力、労働ビザに切り替える方に持っていければ。【加藤：その後移民を考えている？】まだなってみないとわからない。そこまでうまくいくのか、1-2 年働いてみないと。ちょっと頭の中にある」。

なお、彼/女らの言う「移民」とは、ほとんどの場合、カナダの国籍（市民権）ではなく「永住権」取得を指す。これには、カナダ政府は二重国籍の所持を認めているが日本政府はそれを認めていないという背景がある。すなわちカナダ国籍を取得した日本人は、（少なく

とも公には) 日本国籍を放棄せねばならない。「移民」希望者の若者たちはしかし、「やっぱ日本人だし」「日本国籍は一度棄てたら取るのが難しい」「世界でも取りにくい国籍を持って生まれて、これを放棄する理由はない」「投票権だけの違いなら、カナダ国籍がほしいとは思わない」などの理由から、カナダ国籍は求めない。そして日本国籍を保持したい具体的な理由としては、それが民族的アイデンティティの拠り所である以外に、生活上より多くの選択を可能にするから(「また日本で仕事をするかもしれない」)、あるいはインタビューの言葉を借りれば、不測の事態に対する「保険」だから(「家族や友人がいる所だから、いつ帰る理由ができるかわからない」)、などが挙げられる。

日本人青年に見られるこの傾向はまた、韓国から来る青年たちとコントラストをなす。韓国青年の場合、中には日本人青年と同様の(緩やかな)移民願望を持つ者もいるが、多くが大学生である(すなわち親の資金でカナダに滞在している)こともあり、滞在期間が限定されているという意識が高い。また、学生にせよ就労経験者にせよ、「英語を習得することが、母国での就職およびキャリアアップに有利になる」との明確な意識を持つ、いわば「母国エリート」志向者が、日本人青年よりも多く見受けられる⁷⁾。

2. 「自分のやりたいこと探し」がカナダ滞在の最大の動機であり、「英語の勉強」がそれを兼ねている、またはそれと不可分である。

渡航の動機として、一時滞在者からもっとも多く聞いたのは、「英語の勉強をしたい」「海外で生活してみたい」であるが、中には「海外/カナダで働いてみたい」「英語を使った仕事がしたい」というように、「仕事探し」と結び付けて動機を語る人もいる。また、渡航当初は考えていなかった「仕事探し」が、カナダ滞在中に滞在動機の中に入ってくるケースも少なくない。これは彼/女らの多くが20代後半から30代(前半)であることを考えれば頷ける。彼/女らの多くは最終学校卒業後、数年間働き、その仕事を辞してカナダに来ている。職種はデスクワークの会社員、自動車整備士・保母・看護師といった専門職、金融会社の電話係や派遣社員といった比較的短期就労型の仕事など様々であるが、辞める理由は、超過労働に対する疑問(「若いうちはいいが、これからもこんなふうに働けるかわからない/こんなふうに働くのは嫌だ」)、あるいは特に女性の場合、また派遣社員の場合、キャリアが蓄積されないことへの疑問、また自分が就いている仕事が本当にやりたかったことなのかという疑問などである。中には海外旅行/滞在にそなえて、学校卒業後、初めから短期労働型の仕事やアルバイトに就いて(「はしご」して)いた人もいる。いずれも数年間働いてみた上で、30代以降の人生を想像し、現職に見切りをつけていると言える。

そこで次の行動として浮上するのが、「前からしたかった」英語の勉強、および海外(主に英語圏)での生活である。この時、海外生活は、人生に区切りをつけ一時的に息抜きする期間であると同時に、人生の次の段階を模索しなければならない期間でもある。渡航時点での彼/女らの認識では、「英語の勉強」は「前からやりたかったこと」であるから、これをす

れば「本当にやりたかった仕事」が見えてくるはずなのである。一見リラックスのための時間に見える彼/女らの海外滞在期間は、実際にはこのような切迫した期待に裏打ちされていると言える。

だがインタビューの多くは、カナダに渡っても「英語がなかなか上達しない」ことに焦りを感じている。また英語習得を、次の仕事につなげるための手段というよりも、人生の究極の目的であるかのように語る人もいる。さらに、「英語を上達させるために」、語学学校でなく現地の専門学校（ビジネススクールまたはカレッジ）でコンピュータや観光業などのコースを取る人も多いが、そうするうちに英語と専門職スキルの習得の、どちらが手段でどちらが目的なのか自身が混乱してくる場合もある。これらのケースには、人生設計にあたって「英語」という漠然とした分野を入口にすることのリスクが見てとれる。さらに、コンピュータや観光業を専攻した人にとって、それらが「本当にやりたかった仕事」であるとは限らない。むしろ、「もしカナダで就職することになったら役に立つかもしれない」という動機が先立ち、それらの分野が「本当にやりたいこと」という問いは、依然として後回しになっているように見えるケースもある。同様のことは、「カナダに来て偶然出会った仕事」をしている人にも言える。

例えばある 29 歳の女性（労働ビザ；カナダ滞在は通算 4 年 1 ヶ月）は、8 年前に保育士の仕事を辞し、学生ビザでバンクーバーに渡航、ESL の学校に通った。日本への数ヶ月の帰国を 2 回はさんで、現在はカナダに来てから始めたスキーのインストラクターをしながら永住権申請を考慮中である。彼女は「教えるのは好きだけれど、スキーが好きかという一言で言えない」「自分が次にやりたいことや移民〔永住権取得〕が決まったら、〔後継ぎを〕育てるかもしれないけれど、基本的に今はこの仕事に集中している」と言う。

「本当にやりたいこと」が期待したほど明確に見えてこない状態で、人生の次段階の模索を続けるには、当初思っていたよりも長くカナダに滞在する必要がある。ここである者はいったん日本に帰国し、数ヶ月から数年間の短期労働で得た資金や新たなビザを持ってカナダに再(々)入国し、ある者はカナダにしながら滞在の延長を重ねる（上述の女性はその両方を経験している）。興味深いことに、このような人々がやがて「移民」手続きへと進む場合、必ずしも「カナダで本当にやりたいことが見つかったから」ではない。そうではなく、「本当にやりたいこと」を見つけるためにはカナダにより長く滞在する必要がある、そのためには生活費が必要であり、もしそのために（日本でなく）カナダで仕事を得なければ、労働ビザか永住権がなければ不利である、というケースも多々ある。そして労働ビザを得るためには雇用主を見つける必要がある、それが難しければ、「個人移民」として手続きをすることになるのである。

この議論を体現する例を一つ挙げたい。ある 32 歳の女性（観光ビザ；カナダ滞在は通算で 3 年）は、大学卒業後に勤めた銀行を 26 歳で辞し、ワーキングホリデーで 1 年間カナダに滞在した。帰国後、数年間は知り合いのいるコンピュータ会社で「契約のフルタイム」社

員として働き、その間旅行としてカナダを数回訪れる。やがて退職、学生ビザと労働ビザの組み合わせだったビザを持ってバンクーバーのカレッジに入学⁸⁾。この間、卒業後に労働ビザ申請のスポンサーになってもらうことを期待して、市内のコンピュータ会社で無償労働をしたり、他州のアパレル店と接触したりしたが、望んだような対応は得られなかった。2年後、所持していたビザが切れるにあたり、観光ビザに切り替えて滞在を延長、また個人で移民申請をする。現在、留学情報センター（市街にあるもののほとんどは韓国系移民が経営している）で、日本人客向けカウンセラーとして、無償で働きながら申請の結果を待っている。

彼女は、ワーキングホリデー時には1年の滞在で良いと思っていたが、日本に帰国後、バンクーバーを旅行で訪れている際に「住みたい」と思ったと言う。動機は、英語ができるようになりたい、また仕事をカナダで持ちたいということだが、移民は「お金も時間もかかるし」当初は考えていなかった。だが、カレッジに通い始めて1年ほどしてから「働くには移民になるのがいい」と考えるようになる。コンピュータ会社から酷使され、アパレル店からも不誠実な対応を取られ、結局はいずれにも労働ビザのスポンサーとなってもらえなかったことがきっかけのようである。

彼女の場合、「本当はウェブデザイナーをしたい」と語る点で、「やりたいことが見つからない」と語る人々とは異なるかもしれない。だが、『『英語の上達』という当初の目的は達成できていると思いますか』という筆者の問いに対し、「今、[日本人客相手の仕事なので] 停滞している」と言い、「途中から[労働] ビザを取ることが[滞在の] 目的になった。お金[貯金] も限られている。でも日本に帰れば、[また] 外国に住むことに憧れるのではないか。だから、『もういい』と思うまでいたい」と言う。そして海外に住むことのメリットを尋ねられると、「自己満足ですね。英語を使う機会がある。違った生活習慣が見られる」と即答する。

3. 滞在/移民先がカナダでなければいけない理由は、必ずしもない。

一時滞在者、とりわけ移民志望者の中には、カナダ/バンクーバーについて「こんないい所ない」という人ももちろんいる。身近な自然、のんびりとした生活ペース、何歳になってどのような生活を始めようと誰も気にしない個人主義的な風土などは、特に多くのインタビューの口にするカナダ/バンクーバーの長所である。だが興味深いことに、大多数の人にとってカナダ/バンクーバーは、渡航前には特別な愛着やイメージを抱かせる土地ではないようである。カナダのイメージは「特にない」「寒い」「大きい」、カナダを渡航先に選んだ理由はアメリカに比べて「物価が安い」「安全」、イギリスやオーストラリアに比べて「英語に訛りがない」、バンクーバーを選んだ理由は他州の街に比べて「気候が温暖」「日本に近い」というふうに、一般論的に、あるいは他の地との相対的な関係で語られることが多い。この点で彼/女らは、当初から渡航先の国や都市について比較的明確なイメージを持っている口

サンゼルスやサンフランシスコの日本人青年一時滞在者と、コントラストをなす（筆者には2001年、ロサンゼルスで4人、サンフランシスコで2人の日本人の若者にインタビューする機会があった）。

カナダ/バンクーバーに対する比較的無執着な態度は、移民志望者にも見られる。むろん住んでみて快適だから永住権を希望するのだが、多くは、必ずしもそこを「永住」の地と考えているわけではない。状況、特に仕事の有無や必要に応じて、日本や、日本・カナダ以外の国に長期にわたって住むことも選択肢のうちなのである。「将来ずっとここに住むかどうかはわからない。他の国でもチャンスがあれば行く。いろいろ見てみたい。【加藤：カナダやバンクーバーに惚れ込んでの移民、というのとは違う？】僕の場合は違う。[永住権があれば] 出入りが自由になるし、少なくとも日本よりはずっとこっちにいたい」（26歳男性；観光ビザ；永住権申請中）。「永住権をとったら、5年のうち3年はカナダにいないといけないけれど、1-2年は日本にいて良いから、その間には働くこともあるかな」（23歳女性；観光ビザ；永住権申請中）。「拠点はここに置く。季節労働者としてハワイが私を雇うなら行く。向こうで縁があって永住しないかと言われたら行く。カナダを棄てる。1回しかない人生だし、好きな国ならどこへでも行く」（34歳女性；学生ビザ；永住権申請中）。言い換えれば、「永住権」希望と言う時、「永住」に魅力があるのではなく、「権」に魅力があるのである。

「後期モダニティ」「ポスト工業化社会」と「移民予備軍」の若者たち

上に描写したような若者たちを学問的に分析しようとする時、様々なトピックに焦点を当てた、様々な分野からのアプローチが可能である。筆者はすでに、（文化）心理学における「自己（self）」および「セルフ・エスティーム（self-esteem：自尊心、または包括的・安定的な自己肯定感）」の研究を手掛かりに、主として移民手続きを始める以前の一時滞在者が、自分に自信が持てなかったり、現地人パートナーとの間で不平等な関係に陥りがちだったりする理由を分析したことがある⁹⁾。だが本稿では、より社会学的なアプローチで——すなわち日本をはじめ先進国に特有の社会変化、またグローバリゼーションという地球規模の変化の文脈で——これらの若者がどのように「自己」や「世界」を捉えているか、そしてその認識がどのように新しいタイプの移民（予備軍）を生み出しているかを分析したい。

今日の日本および先進国の直面している状況ないし、時代を表す言葉として有益と思われるのは、「後期モダニティ（late modernity）」および「ポスト工業化社会（post-industrial society）」である。前者と「自己」概念の関係についてはアンソニー・ギデンズが、また、後者と「若者」については宮本みち子が詳細な論考・研究を行っている。

ギデンズは、「モダニティ（近代）」を封建的/伝統的世界から分かつものは、「疑い」——あらゆる知識を仮説と見なす態度——であると言い、それは哲学のみならず日常生活にも浸透していると言う。この時「自己」も、自明のものとしてではなく「自省（reflexivity）」に

よって形成されねばならないものとして、人々に認識されるようになる（あるいは「自己」や「自己アイデンティティ」という概念自体、近代の産物である）。さらにギデンズは、今日の世界を『「高度」または『後期』モダニティ』と呼び、そこにおいて「自己」は、「困惑するような幅広い選択肢と可能性の真っ只中で」「自省的に」作られねばならない、と言う¹⁰⁾。例えば「ライフスタイル」の選択——これはある商品を買って消費するという「労働外」の活動だけでなく、「労働」の/における選択も含む——は、われわれの大きな関心事であるが、これにおいても、「われわれは選ぶ以外に選択肢はない」。すなわちわれわれは、気の遠くなるほど多様な商品や、細分化された多様な仕事の中から、何かを「選ぶ」ことを常に強要されているのである。そしてそれは、実質的な必要を満たすためのみならず、自己アイデンティティの語り——「自分が何者であるか」の語り——に、物質的な形を与えるためなのである¹¹⁾。

若い一時滞在者たちがバンクーバーに渡る理由——それは「前から本当にやりたかったこと」を実行すると同時に、英語が堪能になることでライフスタイルの選択肢を広げ、その中から「これから本当にやりたい仕事」を選択することと言える。そしてすでに触れたように、「何歳で何を始めても誰も何も言わない」カナダの個人主義的な風土は、日本にいればできないほどじっくりと、選択作業に時間をかけさせてくれるかもしれない。だが筆者が見るところの彼/女らの問題は、「海外滞在を延長することが本当に選択肢を広げるのか」、「選択肢を広げれば『本当にやりたい仕事』が見つかるのか」ということである。

一つ目の問いを体現するのは、上述のスキーインストラクターのように、労働ビザや永住権を得るために「一生やりたいわけではない/やりたいかどうかわからない」仕事に就いている人々である。また、「既に移民手続きを始めている人」をインタビューーとして募集した際（2004年・2005年）、応答があったのは女性8人、男性2人、夫婦（日本人同士）2組だったが、女性7人のうち5人が「カナダ人男性の配偶者またはコモンロー・パートナー¹²⁾」としての永住権申請であり、残る3人はいずれも、韓国系移民が経営する留学情報センターの日本人客向けカウンセラーであった。これは言うなれば、「留学カウンセラーになるか、カナダ人の配偶者/パートナーとならなければ永住権獲得は難しい」ということである。果たしてこの二つの「選択肢」、特に留学カウンセラーという仕事は、どれだけ多くの人の「本当にやりたかったこと」だろうか。あるいは、それはどのように後のキャリアにつながるのだろうか。男性2人については、一人はカナダ人女性のコモンロー・パートナーとしての申請であり、もう一人は現在、ワーキングホリデー中に見つけた仕事をしているが、「将来、何を専門にしたいか」との問いに対しては「特にない。考えないといけない」と答えている。

二つ目の、「選択肢を広げれば『本当にやりたい仕事』が見つかるのか」という問いを体現するのは、ある30歳の男性である。彼は飲食店のマネジメント業を辞し、永住権取得の希望を抱いて学生ビザでバンクーバーに来たが、「何を勉強するか迷っていた。美容師、旅

行関係、TESL と三つ候補があった」。端から見ればかなりかけ離れた三つの分野だが、これからどのような人生でも始められる、と思う時、可能性が無数に分裂し、「やりたいこと」がかえってわからなくなるリスクを、彼は体現しているように思う。

これに関連して、一時滞在の若者たちはまた「住む場所」の選択肢を無数に抱えているかのように見える。多くは日本とカナダ以外に、アメリカ（特にニューヨーク、続いて西海岸の大都市）、ヨーロッパ、オーストラリアなどにも将来（長期で）住みたいと語る。その時大抵、「仕事があれば」と言うのだが、その「仕事」が何なのかがまだわからない（からカナダで模索している）様子である。彼/女らの語りは、モダニティの特徴としてギデンズが挙げる「空間の『空虚化』（‘emptying’ of space）」を思わせる。すなわち「世界地図という、[地球上の] どの場所にも特権性を持たせないもの」¹³⁾が象徴するように、モダニティが生んだ知識体系は、われわれに世界を、特別な執着を抱かせない、等価な点の集まりとして見せるのである。ここにマスメディアの影響が加われば、バンクーバーもニューヨークもボンも、寒暖や匂いや、現地の人々との生々しい関係から無縁な無機質の、「いつか訪れて住むかもしれない場所」としてわれわれの脳裏に刻まれていく。筆者はこの「世界（旅行/滞在）観」を、若者に人気のガイドブック・シリーズ『地球の歩き方』『地球の暮らし方』（ダイヤモンド社）が象徴していると考え。地球上の多様な国・地方・街の「歩き方」が、写真満載・微細な現地情報入りの同じフォーマットで指南されているだけでなく、「歩き方」と「暮らし方」が似たフォーマットで指南されていることで、土地の間の差異、および「訪れること」と「暮らすこと」の間の差異が見えにくくなっているのである。

次に、宮本みち子の研究を参考にするならば、日本や他の先進国は「ポスト工業化社会」ないし「ポスト産業社会」の状態にあると言える（二者は同じものを指すと思われるので、本稿では前者に統一する）¹⁴⁾。日本では 1960 年代から 1970 年代初頭にわたる重化学工業中心の高度経済成長の時代が終わって、1970 年代半ば以後、「ポスト工業化」の時代に入った。若者が工場労働者として大量に雇われる時代は終わったのである。しかしそれに続くバブル景気の中で、若者の雇用危機の問題は、バブル崩壊後の 1990 年代半ばまで忘れられていた。日本が「ポスト工業化」社会として議論されるようになるのは、したがってバブル崩壊以降である。

宮本によれば、これらの社会変化は、若者のライフパターンに大きな変化を及ぼしてきた。すなわち「青年期から成人期（大人）への移行」に関して、高度経済成長期には、最終学校終了、就職、結婚、子供を持つという「若者が一人前になるメイン・ルートの制度化」があった¹⁵⁾。だがその時代が終わると、若者の高学歴化もあいまって、親への依存が長期化する「ポスト青年期」——年齢的に青年期は脱しているが、「一人前の大人」であるとは言えない時期——が出現する。さらにバブル崩壊以後は、就職難、フリーター・高卒無業者増大、晩婚化・非婚化によって、「一人前の大人」になるためのパターンが崩壊する。言い換えれば若者の人生は、「工業化時代のライフコースに認められた特徴が消滅し、より個人化

しリスクの高い〈選択的人生〉へと転換した…。…今、成人期への移行は多様化し、定まったルートがなくなりつつあるといわれている。仕事の安定性、住宅、家族生活、どれひとつ定まったものがなくなっている中で、若者は自分の目標を定め、自分で道を見つけなければならない状態にある」¹⁶⁾。ここで描写されている日本（および他の先進国）の若者の状況は、ギデنزが描く「自省」重視の「後期モダニティ」の状況と一致すると同時に、それに追い討ちをかけている。

宮本の議論でもう一つ注目したいのは、日本の若者にとっての「就職」ないし「仕事」の意味である。イギリスなど西欧諸国では、「大人になること」は、「シティズンシップ」という「個人と国家の間の契約」（個人は投票をしたり税金を払ったりし、国家は必要に応じてケアや福祉事業を供給するというように、個人が国家に対して義務と権利を持つ関係）の獲得と同義で論じられる素地があるのに対し、「市民社会の発達の素地がなかったわが国では、西欧的シティズンシップはもともと存在しないと考えられてきた」¹⁷⁾。代わりに日本では、「就職をして職場社会の一員となることが、大人になるための主要な条件」であり、「それは経済的自立の達成という意味と、企業への帰属という形をとった社会への完全参入を意味している。若者（とくに男性）にとって、社会と職場は同義といってよい」¹⁸⁾。

バブル経済崩壊後の今日、若者にとって企業は、かつてほど自分の帰属を保証してくれるものとして見えていないかもしれない。だが企業勤務にせよ自営業にせよフリーランスにせよ、若者にとって、「仕事」を持つことが「大人」、すなわち社会の構成員になるためのほとんど唯一の条件である、という点は変わっていないのではないか。これは言い換えれば、若者たちが「大人」としての自己を獲得するには「仕事」にすぎるしかないということである。そして、「自己」の形成において人々にはなはだしく自省を迫る後期モダニティにあっては、「仕事」もまた、はなはだしい自省の上で選ばれなければならない。日本の若者たちが国境を越えてまで「本当にやりたい仕事」を追い求める背景には、このように、後期モダニティに特有の状況と、日本社会に特有の状況の両方があると考えられる¹⁹⁾。

むすびに

今日、日本に生きる若者は、高度経済成長期の若者のようないわば「型にはまった」人生を送らなくてもよい点で、幸せだと言う人もいるかもしれない。だが社会・経済の構造が、若者（特に女性）に安定した仕事を約束せず、また「同じ仕事を続けることが良いことだ」という価値観を必ずしも示さず、それでいて、インタビュー者たちによると親や上司、時には友人が、高度経済成長期型のライフパターンを折にふれて教示する（「[男が] 今仕事を辞めたら戻って来られないぞ」「～歳になったら結婚しなければいけない」）中で、自分なりの「選択的人生」を生きていかなければならない——特に「一生やりたい仕事」を見つけねばならない——若者たちは、果たして「気楽な」人々だろうか。そして彼/女らが、無数——というより無限——の可能性を信じて海外に出ようとすれば、誰も止める者はない。マスメ

ディアやインターネットが下調べを後押しし、飛行機が渡航を容易にし、現地に到着すれば、様々な学校や商店が彼/女らを消費へとせきたてる。彼/女らは、貯金を削りながらそれに投資し、時には低賃金や無償で労働し、ライフスタイル、特に仕事を模索する。しかしどうすれば、無限にある仕事の中からある仕事が、無限にある地球上の点の中からある土地が、自分にとって「本当にやりたいこと」「本当に住みたい土地」になるのか。

この問いに答える術を、筆者は知らない。一人一人がそれぞれのやり方で、「もういいと思うまで」、地球上のあちこちで可能性を追求するしかないのかもしれない。また「自己/アイデンティティ」も、自省のみによって見つかるものではなく、多くの状況との対面で初めて「作られていく」ものであると筆者は考える。だがもし筆者が若者たちに伝えることがあるとすれば、それは、仕事を求めている点で彼/女らはすでに十分に、「大人になる」ための通過儀礼を自分に課そうとしているということ、また、「可能性は無限にある」——それは言い換えれば「本当にやりたい仕事は無限の中から選ばなければいけない」——という考えは、現代がわれわれに見せている神話かもしれない、ということである。そして移民志望の若者たちを「気楽な」または「特定の国家/社会への帰属意識が足りない」人々と見ようとする者は、その前に、彼/女らにとって、また後期モダニティを生きる人間にとって、「自己」の追求が「社会」にも「国家」にも増していかに肥大化した問題となっているか、あらためて考えるべきだろう。

注

- 1) ここでの「移民」の定義は筆者自身による。『社会学事典』(弘文堂)では、「異なる国家間の人口移動あるいはその移住者をいう。生業の本拠を恒久的・半恒久的に移動させる場合をさ[す]」とされているが、本稿では、より移民する人の視点に立った定義を試みた。
- 2) 実際筆者は 2002 年以降、毎夏バンクーバーで、在日コリアンの青年にもインタビューを試みている。だが在日の場合絶対数が少ないこと、広告を出しても応じてくれる人が少ないことなどから、現時点でインタビューできた人数は 3 人とどまる。
- 3) 「日本人、日系人の心のケア・シンポジウム：メンタルヘルス対策の必要とサービス向上のために」と題するこのイベントは、1999 年 5 月 29 日、グレートバンクーバー日系カナダ市民協会、グレートバンクーバー移住者の会、隣組の主催で行われた。発表者は日本・フランス・ブリティッシュコロンビア州在住の(精神)医療専門家、日系諸団体代表者などであり、討論も行われたようである。筆者はこれについての記事を、当時住んでいたカナダ東部で、現地の日本語新聞で読んだ。
- 4) 「観光ビザ」(visitor's visa) は、最長 6 ヶ月のカナダ滞在を可能にするが、6 ヶ月以内の滞在予定で日本から渡加する場合は、特に取得手続きをする必要はない。だが渡加後に、最長 6 ヶ月までの滞在延長をする際には取得手続きが必要である。「ワーキングホリデー」とは、日本・カナダ間の場合、両国間の協定に基づき、18 歳から 30 歳までの両国の市民が、相手の国で最長 12 ヶ月まで働くことの可能な制度である。日本・カナダ間では 1986 年に開始され、年間におよそ 5,000 人の日本人の若者がカナダに渡っている一方、カナダから日本に渡る若者は、物価の違い

のためか 1,000 人に満たない。

- 5) インタビューに加え、筆者は 2001 年夏に、日系人権委員会の同僚と「ソーシャルサービスネットワーク」(現「ピアねっと」)というボランティア組織を設立し、若者から時々電話相談を受けた。時には、リサーチのためのインタビュー相手がついでに筆者に相談事をするとも、逆に、ソーシャルサービスを通して手伝った相手が、後にリサーチインタビューへの協力を申し出てくれることもあった。いずれにしてもインタビューーには、「目的はカウンセリングでなく、私の研究と、日系コミュニティが一時滞在者へのソーシャルサービスを考える際のヒントにすること」と伝え、謝礼を払った。
- 6) 「永住権」を持つ移民 (landed immigrant) は、「国籍 (市民権)」所持者 (citizen) とは異なり、選挙権がなく、また 1 年のうち 183 日はカナダに住まなければならない。永住権を取得してから 3 年後には、市民権を申請する権利が生じるが、この申請をしなければ永住権所持者のままである。「労働ビザ」(working visa, work permit) とは、永住権や市民権がなくてもカナダで一定期間働くことを可能にするビザであり、雇用主を通して雇用センター (Human Resource Centre) に申請する必要がある。
- 7) ただし、韓国語の話せない筆者の、英語によるインタビューに応じてくる時点で、韓国人青年の中でも特に向学心 (およびエリート志向) の強い者がこのリサーチの対象となっている可能性がある。
- 8) 実習のある学校に入学する場合、学生ビザと労働ビザの組み合わせられたものが発行されるとのことである。
- 9) Etsuko Kato, "The Mind Roaming above the Ocean: Mental Health of Young Japanese Sojourners in Vancouver," in Masao Nakamura ed., *Changing Japanese Business, Economy and Society: Globalization of Post-Bubble Japan*, (New York: Palgrave Mcmillan, 2004).
- 10) Anthony Giddens, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, (Stanford University Press, 1991), 2-3, 75.
- 11) Ibid., 81-82.
- 12) 「コモンロー (common law) パートナー」とは、結婚していないが実質上夫婦であるカップルの成員を指す。一年以上の同居の証明があればこのステイタスを申請できる。しかし筆者が見るところ、「移民予備軍」の日本人の中には、結婚と移住の決断がつかねる状態で、あるいはその二つが混同された状態で、結婚ほど慎重を期さずにこの制度を利用する人もいようである。しかしこの制度も、相手と固定的な関係に入る点では結婚と同じであり、慎重を期さなければ、現地人パートナーとの不平等な同居生活の温床となるリスクがある。
- 13) Ibid., 16-17.
- 14) 宮本みち子「ポスト産業社会のゆくえ」G. ジョーンズ & C. ウォーレス (宮本みち子監訳、鈴木宏訳)『若者はなぜ大人になれないのか 家族・国家・シティズンシップ』新評論、2002 年、267-296 頁、および、宮本みち子「現代社会における若者 (1)」「現代社会における若者 (2)」『比較文化研究 若者とジェンダー』第 8 章・第 9 章、日本放送出版協会、2005 年、117-148 頁を参照。
- 15) 宮本「現代社会における若者 (1)」前掲、129 頁。
- 16) 同書、143 頁。

- 17) 宮本「ポスト産業社会のゆくえ」前掲、274 頁。
- 18) 同書、280 頁。
- 19) 文化人類学者・中沢新一は、レヴィ＝ストロースの考察を引用しながら、(少なくとも江戸時代以降の)日本人には、欧米人とは異なり労働を苦役とは思わず、むしろ「働くことは一種の自己実現であり、創造」と考える傾向があることを指摘している（「中沢新一が語る仕事 (1)」、朝日新聞、2006 年 11 月 12 日、15 頁）。このような、日本「社会」というより「文化」に特有の状況も、移民志望の若者の研究において考慮に入れるべきかもしれない。